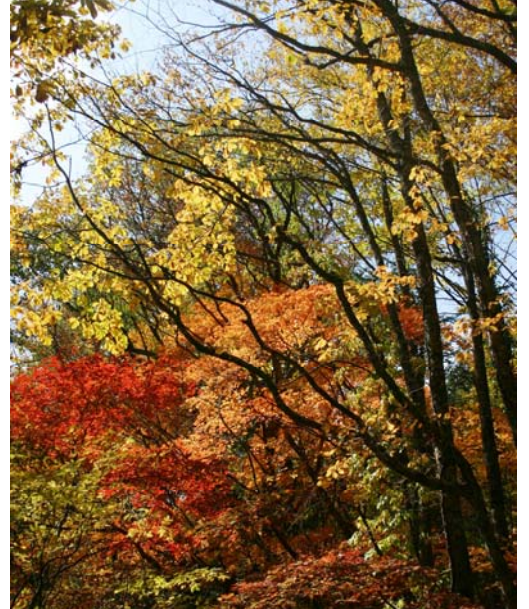


高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 70 号

2009年11月



第106回観察会・中吾妻紅葉観察会に参加して

高橋真希

観察会前日。山内さんから、中吾妻で観察会があると聞いて、急遽参加させていただいた。いままで中吾妻に行ったのは2回きりだが、どちらも深く印象に残っている。簡単に行けない山域(積雪期、登山口から裏磐梯の自宅まで歩いたら3時間かかった)、人跡の少ない自然。近づきたい困難さですら魅力的。ああ憧れの中吾妻。その紅葉はまだ知らない。どんなに美しいだろう…。

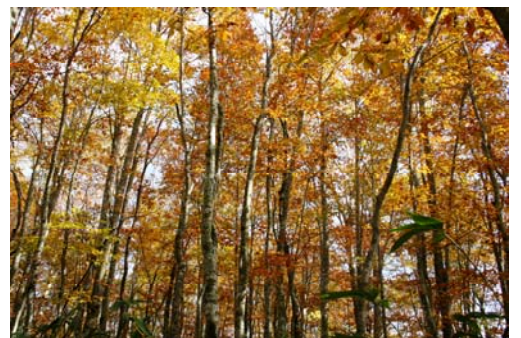
10月18日。おー、秋晴れ。目的のブナ林までは、急傾斜のカラマツ林を登るのだけど、会のみなさんが気さくで、朗らかで、気持ちも足どりも軽くなる。

斜面がなだらかになり、ブナが現れた。横に広がった枝も太い、立派なブナだ。根元にはたくさん実が落ちている。「クルミの味がする！」おっ、そりゃ食べなきゃ(笑)。しいなもあったが、見つけた小さな殻を剥いで小さな実を食べた。うん、クルミみたい。「生で食べられる木の実が貴重だよな」クマにも人にも恵みの木の実。見上げれば青空に輝く黄葉。

艶やかな白い肌のダケカンバ大木。こちらも伸びやかに枝を広げている。若いブナ林は、黄色に茶に色づいて明るく、どこまでも歩きたくなる。「帰りたくない」。佐藤さん、わかるなあ(笑)。

山を降り、唐松川で昼食。美しい紅葉の下、美味しい芋煮をいただいた。ああ、こーんな贅沢な芋煮はなかなか食べられないぞ！(笑)

中吾妻の自然と、高山の原生林を守る会のみなさんに感謝いたします。素晴らしい1日でした。ありがとうございました。



達沢不動滝周辺の自然林を探訪する観察会 (2009年8月23日) 伊賀和子

「高山の原生林を守る会」の活動はホームページなどで以前から注目していた。活動には年に何度かの観察会も組み込まれているので、いつか機会があったら参加してみたいと思っていた。飛び入り参加の形になってしまったにもかかわらず、快く受け入れてくださった皆様に心より感謝いたします。

今回の観察会は猪苗代町の達沢地区で行われ、大山祇神社社叢となっている原生林、不動滝、戊辰の道を植物観察、また歴史の解説を受けながら歩いた。大山祇神社原生林内のコナラ、ミズナラの古木は予想外の巨木で、しかも林立していると言ってよい印象。根元から一本立ちしている姿は一度も斧を入れられることなく守られてきたことを物語っていた。不動滝は一見の価値あるすばらしい光景で、滝へ至る道周辺にはハルニレの大木が立ち、ジャコウソウが一輪咲き残り、滝前では先ほど原生林内で見てきたのと同じ着生シダを見ることができた。佐藤 守さんが「あの着生シダはオシャグジデンド、その下のシダはミヤマノキシノブです」と解説してくださった。戊辰の道をたどった先の慰霊碑前には実をつけて風に揺れるシナノキが涼しげな大きな影を作っていた。

同じ福島県でも浜通りに住む私に会津の植物はめずらしく、とても有意義な一日だった。

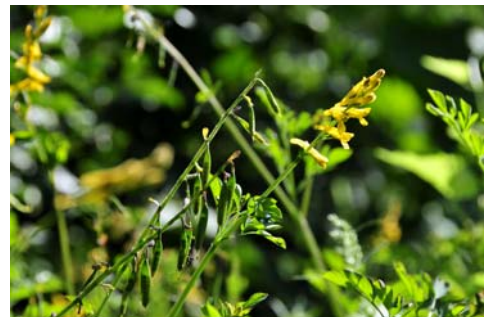
最後に、あの日、話題になったナガミノツルキケマンについて書かせていただきます。(2009年8月31日)



ナガミノツルキケマン(ケシ科キケマン属)

ツルケマンの変種で北海道、本州、九州に産し、朝鮮、中国東北部、シベリヤ東部に分布する。ツルケマンとの大きな違いは、ナガミノツルケマンは蒴果内の種子が1列に並び、ツルケマンは2列に並ぶ。蒴果を陽光にかざすと種子の配列が透けて見える。

(写真:伊賀)



オオウラジロノキ



ジャコウソウ



オシャグジデンド

鹿狼山から 10 ～鹿狼山の実～

小幡 仁子

台風18号が去って、今日は秋晴れの気持ちの良い休日である。朝から頑張って洗濯を3回し、掃除機をかけ、パンジーの苗を庭に植えた。全く主婦は忙しい。あれこれしていたら、お昼になってしまった。鹿狼山に行くのをどうしようかなあ、と思いながらも、山頂のマユミやアオハダの赤い実がきつと良いだろうと思い、出かけることにする。鹿狼山までは車で5分。持って行くのはカメラだけだからお手軽なものである。

さて、駐車場に着いたら、何やらゴロゴロと雷の音がする。あれあれ今日は雷の予報が出ていたっけ?と思っ

たけど、駐車場には10台近くの車があり、間もなく登らしい母娘連れもいる。私も、ぐるっと回っても1時間超、何とかなるさに行くことに決める。

秋も深まり、山も実りの秋を迎えている。登山道は台風が落としていった枯れ葉や小枝が敷き詰められている。コナラやクヌギのドングリも沢山落ちている。でも、こんな落ちたドングリでは、リス君のエサにはならないだろうけど。いつものところでキブシの木を観察する。今年も実は付けていない。冬芽は大部伸びてきている。この木は雌雄異株で、花の軸が短い方が雌株らしいが、花は満開に咲くけれども、実を付けているのを見たことがない。雄株なのか、日当たりがあまり良くないからか。春4月、カタクリの花が終わる頃に、このキブシは見頃となる。黄色の花穂が垂れ下がり、簪のようで可愛い花である。この実で昔は、黒色を染めたらしい。(江戸時代にお歯黒に使われていた)私は、このキブシの実が沢山になったら、少し頂戴して糸を染めてみたいと思っている。でも、これではそんな機会は巡って来ないかもしれない。



キブシの冬芽

登山道沿いの斜面にマムシグサの赤い実を見つける。いつだったか、鹿狼山に登る子供が「うわー、赤トウモロコシ！」と言っていた。子供はうまいことを言うものである。まさに赤トウモロコシだ。あの姿からこの実がなるのは不思議なので、春にマムシグサの中をルーペで観察し、雄しべや雌しべがどのようになっているのか確認しようと思っているのだが、まだ果たしていない。蛇は苦手である。マムシグサはあまり好きになれない植物である。できれば、「蛇はパス！マムシはもっとパス！」だ。そして、トウモロコシと言えどマムシグサである。ちょっと味見をする気にもなれないなあ。



赤トウモロコシのようなマムシグサ

さて、頂上直下にマユミの大木があって、予想通り、今年は沢山の実がなっていて見事である。頂上にもマユミの木があり、それほど大きくはないが、これも沢山の実を付けている。父の話では、昔は鹿狼山には大きなマユミやツリバナの木が沢山あって、庭木として重宝がられた時期に、大部掘られてしまったということであった。これらはその難を逃れたものかもしれない。



たくさんの実をつけたマユミ

ところで、頂上に着くと、「ゴロゴロ」が待っていたとばかりに音高くなった。頂上には赤ん坊連れの若夫婦がいて、背負子に赤ん坊を入れて、荷物をかたづけているところだった。秋の鹿狼山を赤ん坊と共に楽しむつもりで来ていたに違いない。それから、登山口から一緒の母娘の2人組もいる。再び「ゴロゴロ」みんなで顔を見合わせる。「これはいけない。早く降りましょう」と声をかけたけど、誰もそんなに早く雨が降るとは思っていない。東の空はまだ明るく、青空が見える。「まだ大丈夫でしょう」と言っている内にパラパラッと降り出してきた。列の一番後ろに赤ん坊がいる。「赤ちゃんに被せるものはある？」と聞くと「あります」との返事。

アオハダの大木まできて、見上げるとやはり夜空の星のように空を覆っていっぱい赤い実を付けている。でも、先日よりは少なくなった感じがする。今日はこれをじっくり見るつもりだったけど、それどころじゃない。ザーッと雨足が激しくなってくる。自分は濡れてもいいが、カメラは濡らさないように帽子を被せる。細かな雹まじりだ。ずぶ濡れになって中腹の東屋までたどり着く。先に雨宿りしていた4、5人に、大変でしたねえ、と声をかけられる。10分位の差で濡れ方が全然違っている。赤ん坊はどうなったかと思ったら、カッパを頭から被せられて、「エー」と泣きながら入ってきた。お母さんが「ごめんごめん」と言いながら濡れた頭を拭いている。さぞかし驚いたことだろう。東屋で一緒にいたおじさんが「おーよしよし」と小さな足を撫でた。赤ん坊は、みんなに見つめられているのを感じたのか、直に泣きやんだ。

ゲリラ雨はすぐにおさまリ、日が差してきた。山は何事もなかったようにいつもの静けさを取り戻した。私も、濡れた衣服の冷たさが身にしみてきたので、早く降りることにする。家に着いたのが3時過ぎ。丁度1時間半の山歩きである。もちろん、洗濯物はびしょ濡れでいて、午前中の仕事は水の泡となった。(2009/10/10)

東北ブナ紀行 35

奥田 博

まだ岩手のブナ山である。奥羽山脈の奥深い山のイメージ強い和賀岳は今では簡単に登れるようになったが、それでも手強い登り甲斐のある山に違いはない。仙人山は湯田への入口に山を越える人々を遮るようにそびえる。今では高速道路がトンネルを貫き、ダムが川をせき止め、かつての厳しさはない。

68)和賀岳

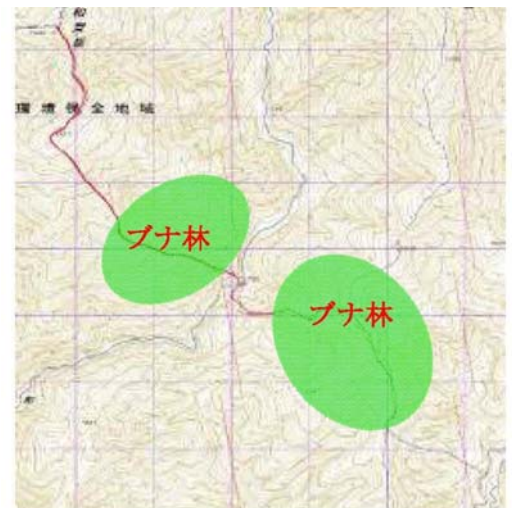
私の中で岩手・秋田県境にそびえる和賀岳は秘境である。どちらのコースをたどっても健脚コースではあるが、今では気軽に登れる山になった。今回は岩手側から訪れた。

高下岳登山口まで長い林道に車を走らせ、歩き出す。鼻から急坂で汗をしばられる。赤沢分岐で一休みするが、ここからブナが素晴らしい。ファインダーを覗いているとブナの展覧会を観ているようだ。二本並んだブナ、枝を分けるブナ、五本行儀良く並ぶブナなど。中でも千手観音のように大きく手を広げているブナは見事だ。高下岳入口から和賀川に降りる。冷たい川の渡渉を終えて再び急坂をたどればブナの森となる。しかし先の粒揃いのブナ林にはかなわないが、それでも一級のブナ林だ。次第にブナは矮少化してやがて森林限界へと出た。ここから山頂が見え、山頂まではすぐだった。

コースタイム:登山口(30分)赤沢分岐(30分)高下岳分岐(30分)和賀川(1時間45分)こけ平(35分)和賀岳



千手観音のような大ブナ



和賀岳

69)仙人山

工場脇の広場に車を停めて歩き出す。北上線の脇を抜けて、秀衡街道と呼ばれる旧い道をたどるが、石垣などが残っている。樹齢数千年の姥杉は環境省の「森の巨人たち100選」に指定されているが、見た目では疲れているように見えたのが気になる。

尾根に上がると、ブナは細く、若木か矮少化か判断がつかない。急な登りが収まると展望地へ。早池峰や岩手山の片鱗が少し見える。田んぼが黄金色に染まっている。そこから山頂まで若い細いブナの中をたどった。狭い山頂では三角点を囲んで昼食とした。

途中まで戻って今度は南に向かって踏み跡薄い道を下りだす。地図では急な斜面を下るはずなので、期待と不安が入り混じっている。の下り道だ。するとスツクリとしたブナが一本現れる。急斜面の下りはジグザグ道がしっかりと付けられて何ら問題はない。この下りのブナが実に見事だ。太いブナはないが、すっきりとしたブナが、夕陽に輝いて活き活きとしている。

ここから下ると次第に人臭くなって、やがて鉱山跡地に入っていく。秀衡街道近くの鉱山であれば金の採掘を思い浮かべるが、実際には江戸中期から昭和29年まで350年余掘られたという。鉱山遺跡という名にふさわしい場所に感動した。鉱山の歴史をさかのぼり、戦前までタイムスリップするような錯覚を覚える不思議な場所だった。

コースタイム:和賀仙人登山口(50分)姥杉(1時間50分)山頂(15分)分岐(1時間)水沢鉱山(45分)岩沢登山口(ゲート)



紅葉にはまだ早かったが、若いブナは輝いていた



仙人山

ナガバノコウヤボウキ (*Pertya glabrescens* キク科コウヤボウキ属)

クリ-コナラ林からミズナラ林の日当たりのよい乾燥した林縁に植生する林床植物で草状の落葉低木。キク科の中では珍しく樹木の仲間分類されているが地上の茎は2年で枯れる。樹木と言われてもちょっと奇異に感じるが、樹木から草本類への進化の架け橋の名残と考えると理解できないことも無い。

葉は1年目の枝に着生する葉と2年目の枝(短枝)に着生する葉の形が異なる。1年生枝葉は明瞭な互生で葉の形は広卵形であるが、2年生枝は披針形の数枚の葉を放射状に叢生(束生)する。葉縁には鋭い鋸歯があり、葉脈は3行脈である。2年枝葉の表側は濃緑色で光沢があるが、裏側はやや白くわずかに毛が散らばる。種小名は「ほとんど毛が無い」という意味で葉の特長に由来する。

花は束生する2年枝の中央部に頭花を1個だけ着ける。小花はアザミ同様、管状花のみである。花柄は無い。花冠は白く、その先端は深く5裂し、反転するので花の姿はハグマ類に似ている。柱頭は花冠から突き出て2つに分かれる。花柱の周りに紫褐色の5個の雄しべで構成された集葯筒が着いている。地下茎から匍匐するように伸びた1年枝の葉腋から伸びた2年枝の上に花が1年枝に沿って直線状に着生するので花が咲きそうと株全体が幾何学的な美しさを醸し出す。

この花には、赤面山で初めて遭遇し、その後、土湯周辺や雨乞山、宮城県の蛤山でも群落を確認できた。植生域は連続的ではなくコロニー的分布であるが里山の真夏から秋口にかけての林床植物として無視できない存在である。果実は1cm程度の冠毛が多数着き、晩秋でもその姿が良く目立つ。母種のコウヤボウキは「高野山の箒」という意味で万葉集の「玉箒」(たまばはき)とされているらしいが、お目にかかったことはないの、本種はコウヤボウキより冷温帯に適應しているのかも知れない。



サワフタギ (*Symplocos chinensis* var. *leucocarpa* forma *pilosa* ハイノキ科ハイノキ属)

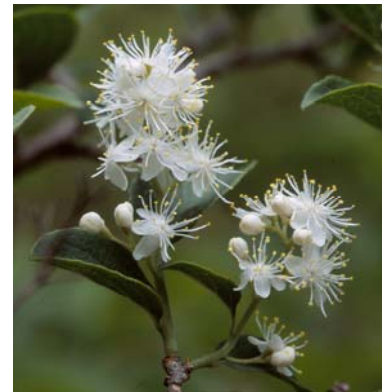
里山からブナ林下部にかけて生育する樹木に「ウシゴロシ」の別名を持つ落葉広葉樹が2種類ある。サワフタギ(沢蓋木)とカマツカ(鎌柄)である。いずれも材質が硬く、牛の鼻輪を作ったことに由来するという。

サワフタギは「ルリミノウシゴロシ」と呼ばれ、沢沿いや伐採後間もない2次林の周縁に植生する。ブッシュ性が強く株立ちする。これはマント植生の構成樹の特徴でもある。葉は互生し、先端が尖った端正な倒卵形で細かい鋸歯と彫りの深い葉脈が醸し出す葉のたたずまいが、気品を感じさせる。似たような特徴を持つアオハダと並んで観葉価値が高い広葉樹と私は思う。

枝の先端部に上向きの円錐花序を形成し、花は合弁花で花冠は5裂する。蕾は綿棒のような形で白が濃く清楚な印象だが、満開時は多数の雄しべが花冠の外に突き出て花序全体が線香花火を連想させ、華やかである。果実は光沢のある青紫で正に瑠璃実。果実をたわわに着けた株の姿は圧巻。果実の形はゆがんだ円形で中に核化した種子が入っている。

カマツカ(*Pourthiaea villosa* var. *laevis*:バラ科カマツカ属)は複散房花序で花は離弁花である。花弁は5枚で花弁の形はほぼ円形。蕾も丸い。雌しべは、花柱が3個に分かれる。果実は赤く、花たくが肥大したナシ状果である。短(果)枝を多く形成し、冬芽は極めて小さい。葉柄の基部が残り、冬芽を保護する特性を持つ。

カマツカは低山の尾根上でも植生が認められるが、湿性地では両種が混生し、開花期も重なる。染料にも利用され錦織木の別名も持つサワフタギはアルミニウムを多く含むことから火山灰に由来する活性アルミナが豊富な黒ボク地帯を好むのかもしれない。いずれにしても、両種ともに、名前からして人間の営みと古くから深い関係があったことは容易に推察される。



サワフタギ



カマツカ

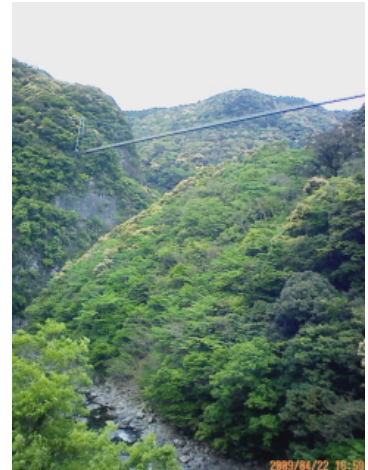
一枚の風景印に端を発した私の「照葉樹めぐりの旅」は、今回は宮崎県へと向かったのです。照葉樹の芽吹いたばかりのつやつやした葉の輝きを美しいと感じるようになった私に、「宮崎・綾の照葉樹林 新緑とシイの一斉開花」を観察する案内が舞い込んできたのです。講師は「姉崎一馬氏」(樹木の写真家)。30年前に月刊予約で手に入れた、あの福音館の絵本「はるにれ」の著者でもあるらしい。その観察会をぐんと身近に感じて参加しました。ミーハーかなと思いつつも、姉崎一馬氏にサインをと、出発の際はあの擦り切れた絵本をザックに入れるのを忘れませんでした。

「綾の照葉樹林」は私の想像をはるかに超えていました。百聞は一見にしかずの言葉通りでした。一日目は「綾の大吊り橋」周辺を歩いて照葉樹林への入門です。綾溪谷に架かる大吊り橋のたもとに近づくと、クリの花に似た強い香りがしてきました。それはシイの花のにおいであるとのこと。山一面がもこもこクリーム色のカリフラワー状態に盛り上がっています。満開のシイの花が造り出す光景なのだそうです。大吊り橋の真真中に立って眺めると、山全体がどこもかしこも照葉樹に覆われていることがわかります。こんな山域が存在していたのかと、ただただ驚嘆するばかり。姉崎氏の説明によると、この辺りのシイは90年くらいとのこと。二次林ということになるのかな。スダジイやコジイは照葉樹のパイオニアらしい。

大吊り橋を渡りきると、いよいよ照葉樹林に足を踏み入れる。あの白い花は？クロバイ。初めて見る樹木です。この新芽が紫色をしているのは？カンザブrouノキ。へえ〜、『寒三郎の木』なんて北風小僧みたい！暖かいところに生えているのに！？どれもこれもお初のものばかり。イスノキ、バリバリノキ、コバンモチ、ミサオノキ…。最初は喜んで観察していましたが、見慣れない樹木、聞いたことのない樹木だけっていうのは、あまり気分のいいものではありません。不機嫌になりそうになった頃、あれっ！これウマノスズクサじゃない？聞けばオオバウマノスズクサとのこと。急に元気になってワクワクそわそわ、ジャコウアゲハが飛んでいるかもしれないのです。今日はもう夕方だから明日に期待するしかありません。と、まもなく、枯れ葉色の蝶が一頭飛んできました。初めて見る蝶でした。姉崎先生はすぐさま「ウスイロコノマチョウか、クロコノマチョウでしょう」と教えてくださいました。驚く私に「蝶少年でしたから…」とおっしゃるので、またビックリ。

翌日は、大吊り橋よりもっと先の、昨日歩いた山より照葉樹林の原生状態を残しているところへ車で向かいました。今日はイチイガシとタブノキの巨木に出会えるのです。車を降りると、これから登っていく山を見上げながら樹種の説明がありました。ところが、そこに、ツツジの花の蜜を吸うジャコウアゲハが群れ飛んでいるではありませんか。姉崎先生のせっかくの解説も上の空で耳に入りません。車を降りた時、道端にオオバウマノスズクサが生えていることに気づいていましたから、もしやと思いました。が、こんなに早くジャコウアゲハに出会えるとは思ってもみませんでした。さすが宮崎は南国です。

いよいよヤマヒルもお出ましになるという原生的な照葉樹林に足を踏み入れました。幸い山道は晴天が続いたおかげで乾いています。ヒルは一匹現れただけでした。わりと明るい樹林の中を進みます。スダジイとコジイの樹肌の違いが明瞭にわかる個体に出会って納得したり、道を塞ぐタブノキの倒木に赤い新芽が出ているのを間近に観察できたと喜んだり、高く高く伸びたイチイガシの樹形がパラソル型になっているのを見上げたりしているうちに、道は急坂にさしかかりました。ジグザグに登っていくと、まもなく本日のメインの巨木タブノキに到着しました。直径や幹周りを姉崎先生から伺いましたが、忘れちゃった。今まで見たどの樹木よりも巨木です。こういう樹木に出会ったときの形容を私は知りません。幹に触ったり、幹の周りをうろうろしたり、枝葉を見上げたり、再び訪れることはないだろうタブノキの巨木を眺める。…その近くで拾ったイチイガシの殻斗とドングリを、タブノキの巨木に出会えた記念にと持ち帰りました。



その日は、もう一つ印象に残ることがありました。観察がまもなく終わりという頃、咲き始めたばかりのシイの花を姉崎先生が望遠鏡で見せてくださいました。レンズを覗くと、空に向かってツンと伸びた若々しい花と、柔らかい黄緑色の、やや細身の葉を間近に見ることができました。つややかで美しく、鋸歯までハッキリと見えます。これ、本当にシイの葉？と疑いをいだいてしまいました。それで、「シイってこんなに鋸歯があるのですか」と質問しました。すると、姉崎先生はその木を別の角度から観察し直してくださいました。そして、「うーん、〇〇かな？」と迷ってしまわれたようです。ちょうどそこへ先生の奥さまの恵美さんがやって来ました。先生は「あれは〇〇かな」と恵美さんに尋ねられました。すると、双眼鏡を覗いて確認された恵美さんは「花が上に伸びているからシイですネ」とさりとおっしゃいました。「そうだった！やっぱりシイでいいんだよな」と姉崎先生の安堵の声。綾の照葉樹の観察に20年も通われているとおっしゃる先生が、私の唐突な質問に、つい識別のポイントを忘れてしまわれたのでしょうか。そういうところにより一層親しみを覚えました。照葉樹に関心をいだいて一年そこそこの素人のつぶやきに、姉崎先生と奥さまの恵美さんはきちんと応対してくださいました。その迷いの観察の会話から、シイとカシ類の花の付き方に違いがあるらしい、家に帰って、早く「樹に咲く花」の図鑑で、シイとカシ類の花の付き方を確かめたいと思いました。新たな観察のポイントを得たことは私にとっては嬉しい収穫なのです。

今回の旅行は「照葉樹林をめぐる旅」の完結にと考えていたはずなのですが、まだ照葉樹の旅は続くことになりそうです。(2009.5.10)



仮称ハッタチアザミとの出会い

山内幹夫

去る、10月3日に、国立科学博物館の門田裕一先生がいわき市にいられて、いわき市文化センターにおいて「福島県のアザミ類の分類と分布」と題した講演会を行った後、波立海岸に行き、課題となっている仮称ハッタチアザミの現地調査を行いました。その結果、仮称ハッタチアザミは、主に岩手県の遠野市を中心に分布するアザミと関連する新種である旨、教えていただくことができました。

最近、新聞紙上にも掲載されて、多少は注目されることとなった仮称ハッタチアザミについて、その発見のいきさつや、今後の課題について、触れてみたいと思います。

そもそもは、昨年(2008)の9月29日、楡葉町の特別養護老人ホームに入所している母親を見舞った後、いわき市平の印刷所に校正原稿を届けに行く途中、波立海岸にツワブキの花を観察するために立ち寄った際に見つけたものです。昨年の9月は、オオカニコウモリやタマブキ・センダイトウヒレン・ノハラアザミなど、キク科の植物に非常に興味を持っていて土湯の山中や湯川溪谷などを歩き回っていましたが、その日、波立海岸に行った時は、お目当てのツワブキは未開花で多少がっかりしていたところ、初めて目にするような姿のアザミに出会ったのです。不思議な姿でした。根生葉は既になく、茎葉は全縁で鋭い棘が葉縁に並び、頭花は狭筒形で點頭していました。アザミの葉に特有な歯牙状の欠刻もなく、とにかく気になったので、デジカメで200カット以上記録写真を撮影いたしました。その時は、これだけ特徴的なアザミであれば、自宅に帰って植物図鑑を調べれば種類は一発で分かるだろうと期待していたのです。

その日は、いわき市での所用を終えて、葛尾村の山中でさらにアザミ属の観察を行ってから帰宅し、気になっていた波立海岸のアザミについて植物図鑑で調べたところ、該当する種がありません。気になって仕方ないので、自分のブログ「やまがっこう」に投稿して皆さんに教えを求めるとともに、写真をプリントして福島県植物研究会会長の湯澤陽一先生にお送りして教えを乞いました。ところが、湯澤先生も見つけない未知のアザミということで、アザミの分類では第一人者の国立科学博物館植物研究部の門田裕一先生に資料を送ってしらべてもらうことになりました。その結果、新種である可能性が指摘されたのです。

今年の3月15日に仙台市で開催された、日本植物分類学会第8回大会の、一般公開シンポジウム「東北地方の植物相の成り立ち」において門田先生が「東北のアザミ—ナンブアザミと所属不明のアザミたち—」と題して



ハッタチアザミの花

研究発表され、そのなかで波立海岸産の未知のアザミについて仮称ハッタチアザミと称して発表されました。その折りに僕は門田先生と初対面しお話を伺いましたが、そこで門田先生は今年の9月下旬に波立海岸で現地調査を行いたいと希望されました。

こういう経過を経て、今年の10月3日に門田先生による波立海岸の現地調査が行われたのです。この結果については、来年2月に専門誌に発表され新種記載の運びとなる予定です。今後の課題としては、何と言っても、自生地保全につきます。何とか保護されるよう、県の自然保護担当課にはお話しし、施策が実施されるようお願いいたしました。



ハッタチアザミの葉

第107回自然観察会案内：天井山観察会と総会

日時：2009年11月29日（日）8：00～16：30

集合場所：小鳥の森入口駐車場 集合時間：8：00 参加定員：30名（総会は定員無し）

総会会場：福島市立子山自然の家（960-1321 福島市立子山字金井作1 024-597-2951）

内容：午前中は天井山の里山の植生と人との関わりなど観察します。午後は立子山自然の家で総会です。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300円） 申し込み：11月28日（土）まで

＊ その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

「第30回東北自然保護の集い」

テーマ：温暖化対策と里山の保全を考える

1. 日時：2009年11月28日～29日（土～日曜日）
2. 場所：福島県耶麻郡猪苗代町中の沢温泉「中の沢花見屋」0242-64-3621
3. 日程：28日（土）12：00受付
記念講演（8000m峰に見る温暖化）：北日本海外登山研究会 会長 保坂 昭憲氏
現地報告 尾瀬における保護対策と課題、風力発電の諸問題、猪苗代湖の水質悪化と改善の取り組み
特別報告 日本の天然林を守る活動
各地からの報告（山形・秋田・青森・岩手・宮城）
4. 主催：東北自然保護団体連絡会・「第30回東北自然保護の集い」福島大会実行委員会
5. 参加費：A、集いのみ参加 1,000円 B、集い&懇親会 6,000円 C、宿泊込み 10,000円
6. （連絡先）
 - ① 高山の原生林を守る会 高橋淳一 024-593-1990（TEL・FAX）
Eメール azumatakayama1805@river.ocn.ne.jp
 - ② 博士山ブナ林を守る会 東瀬紘一 0242-54-3643（TEL・FAX）
Eメール tkouichi@aioros.ocn.ne.jp
 - ③ 福島県自然保護協会 星一彰 024-557-8265（TEL・FAX）

「高山」高山の原生林を守る会会報 第70号 2009年11月発行
編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>
代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）
郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」
入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで
編集：佐藤・奥田・鈴木